

最澄の梵網戒受容と本覚思想

白 土 わ か

序

最澄が具足戒を棄捨し、梵網戒を建立したことは、日本佛教の戒律に重大な結果をもたらすに至ったが、そのことはすでに周知の事実である。

しかし一方、日本天台の思想の面から考えてみると、最澄の梵網戒受容は、また別な意味をもっていた事に気付かされる。すなわち、日本天台における中核の思想とみなすべき本覚思想を、導入する要因となっていたということである。勿論、日本天台の本覚思想の興起には、種々の原因が考えられるが、最澄の梵網戒受容はその中で、大事な要因として考え直さるべき問題ではないかと思われる。

本覚思想が日本天台にとって重視すべき思想であることは、中古天台以来さかんに喧伝されて来たことであって、恵檀両流に於て、恵心流は本覚門を、檀那流は始覚門をその教学の主たるものとするといわれ、その中で恵心流がひとり榮えて本覚門が重んぜられてきたのであった。また中古天台では、最澄は道邃より本覚門を相承したと伝えて、これまた本覚門を重んずる理由となし来たのである。現代では島地大等師が、日本天台の中心思想として本覚思想を重視すべく指摘されたのであった。

このように、重視され喧伝された本覚思想とは、もともと衆生本有のさとり^①の謂である。その源泉は、佛教にはもともちあったものであるうし、又、それを顕在的に掘り起すことは、おおむねの大乗佛典の指向するところである。が、それがとくに顕著にあらわれてくる例をあげれば、涅槃経には覚法蔵・佛性・如来蔵・我といひ^①、究竟一乘宝性論には自性清浄心といひ^②、大乘起信論に至って、始覚とならんで本覚が説かれる。起信論にいう本覚とは、心体離念の相であって、如来平等法身に他ならぬとし、始覚は本覚により、不覚がある故に始覚ありとするものである^③。起信論にはまた本覚を、真如・自性清浄心・如来蔵とよぶともいつている^④。

起信論の本覚を、まず問題にしたのは華嚴教学であるが、法蔵から澄観に至ってその意味内容は拡充してゆき、後の佛教学に影響を与えてゆくこととなった。

日本では最澄と同時代の空海が、起信論の註釈であるところの釈摩訶衍論を重視し、本覚ということばを拡大解釈していった。最澄は釈摩訶衍論を偽作として用いなかったが、空海とは別の面で本覚思想への近づきを示している。

日本天台において、本覚思想の萌芽がすでに最澄にみられることについては、塩入亮忠博士が最澄の註無量義經における佛身論を中心に論証をすすめておられるが^⑤、本稿では、最澄が具足戒を捨てて専ら梵網戒によったということは、本覚思想を日本天台に導入するに至った注目すべき問題であるとの視点から、考察を加えてみようと思うのである。以下、順を追って記してゆくことにする。

一 梵網戒の本質

梵網戒は、梵網盧舎那佛説菩薩心地戒品第十卷下に述べられるものであるが、そこに

設我本盧舎那佛心中初発心中常所誦一戒光明金剛宝戒、是一切佛本源、一切菩薩本源、佛性種子、一切衆生有佛性、一切意識色心是情是心皆入佛性戒中、当常常有因、故有当常住法身、如是十波羅提木叉出於世界（中略）

是一切衆生戒本源自性清淨^⑥

とあるのは、よく梵網戒の本質を示すものといふことができよう。すなわち、梵網戒は佛性そのものであり、自性清淨の戒であること、一切衆生には佛性あり、本来常住なる法身を有するが故に、その意識色心は佛性戒に合致しうるといふのであるが、この説示は注目すべきものである。

この戒の本質は、人間本来の中に具有する佛性に他ならず、人間は自らの中に行為の規範を持っていることを示している。その意味で梵網戒は、本来として自性清淨なる人間を認めていることになる。

この梵網戒の性格を更に探るために、しばらく仁王般若経との比較対照を試みることにしたい。

二 梵網経と仁王般若経

梵網経は、五世紀前半頃に中国で作られた經典ではないかと思われる。仁王般若経もまた中国で作られたものであるらしく、この両経には種々の類似点が見出され、共通の思想基盤の上で成立した可能性を思わせるものがある。以下、その類似点を列挙してみると、

(イ) 梵網経は蓮華台藏世界の盧舍那佛を教主とするが、仁王般若経（羅什訳^⑦）は、梵網経の蓮華台藏世界と同じ構図の世界に、宝満佛が坐している。宝満佛は盧舍那佛の異訳である。仁王護国般若経（不空訳）では、遍照如来となつているが、これもまた同じく異訳である。

(ロ) 梵網経上巻は空を標榜し、下巻には佛性を強調して涅槃経への接近を示し、また華嚴経の影響を強く受けている跡がみられる。仁王経は空般若を標榜しながら、涅槃経の常楽我淨を強調し、また華嚴経の影響のもとに成した形跡がある。

(ハ) 梵網経の戒は十重禁四十八輕戒であるが、仁王経は六重戒二十八罪の優婆塞戒をあげ、ともに在家戒としての

性格をもつ。但し、梵網戒は、在家・出家に通ずる戒である。

(二) 梵網経は菩薩地を四忍四十心に分けるが、仁王経はこれを五忍四十一心に分ける。菩薩地の分類の仕方に類似性をもつ。

(三) 特殊な語法として「楽虚」という用語が、梵網経にも仁王経にも存在している。これは他には用例を見ない珍しい用語である。

(四) 梵網経の軽垢罪第一には、国王百官が位を受けるとき、まず菩薩戒を受けなければならない、一切の鬼神来りてその身を護るであろうというが、仁王経には、国乱れんとするときには鬼神乱り、百僧、般若波羅蜜を誦するときには、鬼神来りて国土を守るであろうということがある。受戒もしくは百僧の般若誦誦が、国王や国土に鬼神の加護をもたらすという思想である。

その他、両経には類似点がおかぞえられるが、共通した思想基盤において成立した可能性が考えられるようである。五世紀頃の中国において、梵網経は新大乘戒建立のために、仁王経は護国思想宣揚の目的をもって作られたものではないだろうか。

これら両経に近い經典として、瓔珞本業経・心地観経等があるが、これらの諸經典が醗酵された地盤を考察してみることが、日本佛教の思想研究にとっての必要事と思われる。ちなみに、起信論の成立事情も、こうした点への顧慮が必要と思うが如何であろうか。

三 仁王護国般若波羅蜜多經の「本覚性」について

仁王護国般若波羅蜜多經卷上（不空訳）には、

我常語諸衆生、但断三界無明尽即名為佛、自性清浄名本覚性、即是諸佛一切智智、由此得為衆生之本、亦是諸佛

菩薩行本、是為菩薩本所修行^⑧

という一節があるが、これに注目してみたい。三界の無明を断じ尽くした自性清浄なるもの、それが本覚性であり、佛智に他ならず、これによって衆生としての本源を得るといことは、自性清浄なる本覚性を、衆生が本来具えていると理解してよいと思われる。

無明を断じて本覚性が得られるのであるが、これは、起信論の始覚と本覚の関係にあたる。しかし、起信論よりも更に展開した本覚思想というべきで、本覚性を佛智としている点、衆生の本源の問題にまで及んでいる点等が仁王護国般若経の立場である。起信論では、如来平等法身といい、佛智とまではいっていない。

仁王護国般若経は不空訳であって、羅什訳とされている仁王般若経を書き改めたものであるから、不空の解釈が入っていると考えられるであろうが、羅什訳の方は、この問題の箇所をどのように述べているかをみてみよう。

我常語、一切衆生断三界煩惱果報尽者名為佛、自性清浄名覺薩婆性、衆生本業是諸佛菩薩本業本所修行^⑨

この羅什訳では、「本覚性」とはいわずに「覺薩婆若性」といっている。また不空訳の「由此得為衆生之本」は、羅什訳では「衆生本業」となっている。覺薩婆性とは覺一切智性であるが、覺の意味を、佛智と理解するか、覺知・靈知の意味に理解するかの二通りが考えられるようである。不空はこれを覺知・靈知の意味にとり、「本覚性」と改めたものであろう。しかし、覺薩婆性を佛智の意味に理解するにしても、それが衆生の本業である限り、衆生がもともと持てるものであり、すなわち本有の覚性と理解してよいであろう。それはまた、諸佛菩薩の本有の覚性でもあるが、佛菩薩はその本有の覚性によって修行し、自性情浄の智を開顯したのである。そこには本覚と始覚との関係が考えられるであろう^⑩。

かくて、羅什訳仁王般若経の「衆生本業」は、自性清浄なる覺一切智性であると理解してよいと思われるが、しかし、羅什訳よりも不空訳の方が、仁王般若経が示そうとする内容を、よりの確に示しているかに見え、人間の覚性

を積極的に認めている点に注目したい。それは、梵網經が戒の本源を人間の佛性においたのと相通ずるものがある。梵網經の戒は自性清淨なのであるが、仁王般若經のことばを借りれば本覺性の戒である。

四 最澄の梵網戒理解

では、最澄は梵網戒の本質をいかに理解していたのか、それを光定の伝述一心戒文、最澄の授菩薩戒儀・註無量義經・顯戒論によって考えてみたい。

(4) 伝述一心戒文の場合

光定の一心戒文卷中によると、弘仁十三年三月国忌の日に、一乗戒建立の由を太皇に上聞の折、御前にて読みあげられた書を光定が見るとそれは最澄の書であった。そのことを光定は

先師自作書也、彼書云、自性清淨虛空不動戒、自性清淨虛空不動定、自性清淨虛空不動慧、欲伝此戒^①と記している。最澄は上聞の書に、自性清淨虛空不動の戒定慧三学の戒を伝えたいと記しているわけである。

この自性清淨虛空不動の三学とは、もとは道璿の註梵網經によるものであることを、一心戒文は更に伝えている。すなわち

今案道璿和上註梵網文、彼梵網經說、我已百劫、修行是心地、号吾為盧遮那、彼注文云、修行者天台師說、修行一切之法不生不滅、不常不断、不一不異、不来不去、常住一相、猶如虛空、言語道断自性清淨、是名修行、如是行人、於自性清淨心中、不犯一切戒、是即虛空不動戒、又於自性清淨心中、安住不動、如須弥山、是則虛空不動定、又於自性清淨心中通達一切法、無碍自在、即是虛空不動慧、如是戒定慧、名盧遮那佛^②

とあるものである。道璿の註梵網經は現在では散佚していて、一心戒文のこの箇所によってしか知ることができないものであるが、この中にいう「天台師」とは誰をさすのか不明である。天台師といえば智顛のことがまず想定されるが、

この場合には、無理があるようである。何故なら、道璿が梵網經の註を作るに当って、「修行」の意味を天台師の説によって註しているわけであるが、そこに引用された「自性清淨」という語辭は、智顛がかつて用いなかったところであり、また、智顛の著作とされる梵網菩薩戒經義疏では、梵網經のこの箇所についての註釈はなく、当然、「修行」ということばについての註釈はないのである。

道璿はその註の中で、「於自性清淨心中、不犯一切戒、是即虛空不動戒云々」と、自性清淨心中に安住した戒と定と慧をいい、自性清淨心を打出してきている。ところがまた一心戒文では、鑑真の弟子法進の註梵網經にも道璿の戒文と同じことを述べているといい、かつ、智顛の国清百録の「普礼自性三学」と同じであるといっている。法進の註梵網經は現在では散佚して見よしはないが、智顛の国清百録の普礼文では「普礼自性三学」とはいわず、

普礼十方三世諸佛虛空不動戒藏盧舍那佛 普礼十方三世諸佛虛空不動定藏盧舍那佛 普礼十方三世諸佛虛空不動
慧藏盧舍那佛^⑬

とあり、虛空不動の三学といい、自性清淨の三学とはいわない。そこには、智顛の思想と光定の理解面にはずれがあるが、光定はそのことを意識せずに、戒は自性清淨の戒であり、三学は自性清淨の三学であると考えているようである。光定のこの理解の仕方は、最澄の戒思想をそのままに受けついだ結果であると思われる。最澄の戒思想は、智顛のそれの上に、自性清淨という本覚的な思想をつけ加えた跡がみられるが、最澄はそれを、道璿の註梵網經よりうけて、展開せしめていったとみるべきであろう。そのことを、更に授菩薩戒儀の文にあとづけてみよう。

(四) 授菩薩戒儀の場合

最澄は授菩薩戒儀第一開導に

此即又如來一戒金剛宝戒、是則常住佛性、一切衆生本源、自性清淨虛空不動戒、因此戒以顯得本来本有常住法身

具三十二相^⑭

と記している。これは、戒の本質について梵網經に説かれる論旨を、一步すすめたものとなっている。すなわち、如来の一戒金剛宝戒は常住の佛性そのものであること、それは衆生の本源と同質であること、衆生はこの戒によって本有の常住法身を得ること、いいかえれば、衆生は自らの中に本来具有している戒の本性によって、未顕にして本具の法身を開顯することを立論している。而して、この戒を「自性清淨虚空不動戒」といつているが、これは前述の通り、道璿の註梵網經の踏襲であろう。

(ハ) 註無量義經の場合

次に最澄の註無量義經第一によると

如一衆生本来具有三佛陀性、一切衆生亦復如是、已顯為佛陀、未顯為衆生、分顯為菩薩、言戒者謂戒身、即佛身中虚空不動戒、又一戒金剛宝戒、又撰律儀戒撰善法戒撰衆生戒、言定者謂定身、即佛身中虚空不動定、又首楞嚴定又金剛三昧定又無量義処定、言慧者謂慧身、即佛身中虚空不動慧^⑤

とあるが、まず、衆生は本来、三佛陀性を具有するということは、最澄の本覚思想として注意すべき点である。そして、戒を佛身中の虚空不動戒であると定義づけているのは、戒が衆生の本質に根ざすものであることと、その普遍性を立論するものである。何故なら、衆生の中には三佛陀性が本有として存在するというからである。虚空不動とは、普遍性と絶対性の意味であろう。

(ニ) 顕戒論の場合

次に顕戒論卷上の冒頭の偈によって、最澄の戒思想を考察してみよう。この偈はもとから付せられていたものか、後人が付加したもののか、一応吟味して見る必要があるやに思われる。それは主として、その中の密教的要素によるものであるが、しかし、その内容を見てゆくと、最澄の戒思想に齟齬するものではないようである。偈に

稽首十方常寂光 常住内証三身佛

実報方便同居土 大悲示現大日尊

(中略)

二種生死諸有情 防非止惡護佛種

開悟一心法性本 自受法樂遊寂光^⑮

というが、「常住内証三身佛」は、前述の註無量義經第一の「衆生本来具有三佛陀性」や、授菩薩戒儀の「因此戒顯得本来有常住法身具三十二相」の文と照らしあわせてみると、そこには一貫性が認められる。また、「大悲示現大日尊」という密教の大日尊は、光定の一心戒文にも出されているところである。一心戒文には、

敬礼常寂光土毗盧遮那遍法界諸佛一心戒藏(中略) 盧遮那一心戒(中略) 大日如来即自受用法身、盧遮那佛是則他受用法身、本歸於末、他受用法身即是自受用法身^⑯

と述べられているが、戒は盧遮那佛の一心戒であること、盧遮那佛は大日如来に他ならず、他受用と自受用との両面からそのようによぶとしている。すなわち、盧遮那佛の一心戒である梵網戒は、大日如来の戒であるということになる。また、一心戒文では、自性清浄心は阿字門であり、本不生際であるという密教的な解釈をしている。^⑰ それと同じことは、最澄の依憑天台義集の「大唐南岳真言宗沙門一行同天台三德数息三諦義」の項の下に見えるのであって、

遠離一切戲論至於本不生際、本不生際者即是自性清浄心、即是阿字門^⑱

とあるが、一心戒文は最澄の密教思想を受けついでるものである。このように、一心戒文は最澄の戒思想を忠実に祖述したとみることができるし、顕戒論の冒頭の偈の密教的な戒解釈は、一心戒文に照らしあわせてみて、最澄の思想に齟齬せぬものと考えてよいであろう。密教的である点からしても、最澄が梵網戒を本質的にとらえていたといえよう。

以上の、光定の一心戒文や、最澄の授菩薩戒儀・註無量義經・顕戒論の偈によって、最澄の梵網戒の本質に対する

理解は、梵網戒は自性清淨戒であり、戒の本質は本来として衆生の内に存し、衆生は自己の本源に根ざした戒によって、自己の内なる未顕の三佛陀性を顕得できるとする、本覚思想的なものであると考えられる。そして、その本覚思想は、大乘起信論の始覚に対する本覚の立場に近い。後の中古天台に於て、本覚の意味が転化してゆく以前のものである。

五 梵網戒についての先駆思想と最澄

最澄の梵網戒についての思想と立場を理解するために、その先駆となった思想について考察をすすめてみたい。最澄が顕戒論に引用している梵網経註には次のようなものがある。

- 1 洗鉢の梵網経菩薩戒疏
- 2 明曠の梵網経菩薩戒疏刪補
- 3 南唐の註経
- 4 智周の梵網経本疏
- 5 太賢の梵網経古迹記
- 6 元曉の梵網菩薩戒本持犯要記

内証佛法相承血脉譜に名前をあげるものは、

- 1 道璿の註梵網経
- 2 慧思の受菩薩戒儀

依憑天台義集序には、

東唐之訓聞彼戒疏

とあり、伝述一心戒文に

1 道璿の註梵網經

2 法進の註梵網經

3 明曠疏

等の引用や、その名をあげているのがある。これらの梵網經疏を、最澄は、大乘戒建立にさいして、種々なる問題に対応するのに、その立証として引用することが多く、梵網戒の本質に関する問題とのみは限っていない。しかし、最澄が関心を払ったこれらの疏の中から、梵網戒の本質にかかわるいくつかの問題をとり出して、最澄との関連を考えたい。

(1) 明曠の梵網菩薩戒經疏刪補の問題

明曠の疏は、智顛の菩薩戒經疏を補足したものであるが、その戒解釈には涅槃經の影響が強くみられる。それは智顛を踏襲しながら、それよりも一層、涅槃經的色彩をもつ。たとえば、

因戒法入十発趣乃至等覺、名之為因、為覺為果、若因若果佛性常住行願無滅、名因果佛性常住藏也^②

とあるが、梵網經の戒法を、佛性常住の場における因果の關係に見るものである。または、

佛性常住常是正因法体遍故応知以修了性以性発修性不二^②

とは、佛性常住と修証不二の立場で梵網戒を受けとめるものである。

これらは、涅槃經の佛性常住が、梵網戒が修せられ証せられる場であり、戒の因果が成就する場であることを認める意味で、戒の本覚的解釈に近いといえるであろう。しかし、自性清浄とまでは言っていない。

湛然の授菩薩戒儀は、最澄もその戒儀の中に、十二門に分つ形式に於てもそれを踏襲している。湛然の戒の精神は、戒儀で見る限りでは起信論に近いものをもつ。

湛然も明曠も、智顛の菩薩戒疏よりは最澄に一步近いものを思わせる。また、明曠疏は、一心戒文によれば、最澄が範をそれにとつたと記している。

(四) 慧思の受菩薩戒儀の問題

内証佛法相承血脉譜中の菩薩戒相承譜には慧思について

造受菩薩戒文一卷盛伝於世多依瓔珞伝也^②

と述べている。慧思の受菩薩戒儀が盛んに世に伝えられたということは、奈良時代以来、慧思が日本に於て尊敬されていた事実があったことを物語るものであろう。それは鑑真の門下たちが、慧思は聖徳太子の前身であるとさかんに伝えたといひ、またその教学がもてはやされていた形跡がある。一心戒文によると

律宗豊安大僧都函南岳大師等影、以奉在招提寺堂、朝夕之勤頂礼師影、知師恩信彼徳、自性清浄心随縁心深義発
自思大師流、大日本国聖徳太子生在皇家、思大師垂迹在皇太子宮、作法華疏亦法華経講岡本宮從爾之後来佛法久、
四月八日七月十日、知恩之孝報恩之行流八嶋国^③

と見えるが、これは注目に価する記事である。豊安が唐招提寺に於て、慧思の影を礼拝していたという事実と、慧思は聖徳太子の前身であつて、その垂迹以来、佛法が久しく行なわれるようになったという、信仰に近い尊敬の念が持たれていた事実^④に留意しなければならぬであらう。そして、自性清浄心と随縁心深義は慧思の流より発している^⑤と信ぜられていたということは、最澄の思想研究にとつても見逃せぬ事実である。

自性清浄心と随縁心深義が、慧思より発したものと考へられないが、最澄の思想の上にそれらが影響していることは、上来述べ来た通りである。

この思想の淵源としては、大乘止観法門を考へなくてはならないであらう。慧思の書として信ぜられてきたこの書は、正倉院文書によると

天平十六年十二月二十四日

大乘止観法門一卷 南嶽思禪師曲授以明心道^②

として入っているのであって、この書が知られていたことが知られる。そして註として、「南嶽思禪師曲授以心道」とあるのも、この書の性格を示すものといえよう。

大乘止観法門によると

此心即是自性清浄心、又名真如、又名佛性、復名法身、又称如来藏（中略）中実本覚故名為心、故言自性清浄心^③

と、明らかに、自性清浄心と本覚思想があらわれているのである。最澄がこうした風潮を受けていたことを見逃すわけにはいかないであろう。

慧思の受菩薩戒儀には

凡有心者咸具佛戒、各各円満無有欠減、問既然如是何須更受、答以暫亡故約事重明、即知全心是戒、全戒是心^④とあるが、慧思にすでにこのような戒についての見解のあることは興味深いことである。最澄の戒思想は、湛然や明曠よりもむしろ慧思に近いからである。この受菩薩戒儀が盛んに世に伝えられていたと、一心戒文にいうが如き意味に於てであろうか。

(ハ) 道璿の註梵網經の問題

内証佛法相承血脉譜中の達磨大師付法相承譜には、道璿について、吉備真備の纂を引用して

和上每誦梵網文其謹誦之声零零（中略）遂集註菩薩戒經三卷、非我輩之所逮更何得以称述^⑤

と載せている。道璿の註梵網經が秀れたものであったことを示しているが、この書は現存せず、ただ一心戒文の中に引用されて残るのみであるが、そのことについては前述の通りである。そこでは、梵網戒は「自性清浄虚空不動戒」

とされているが、それは智顛の「諸佛虚空不動戒藏」に発して、そこに「自性清淨」がつけ加えられたものである。鑑真の弟子法進の註にも同じく載せていると、一心戒文は伝えているから、それは比較的に一般的な梵網戒解釈であったかも知れないが、最澄もそれを受けているのである。

道璿は、血脉譜に載せるところによれば、禪法と華嚴も伝えているが、道璿の思想が本覚的色彩を帯びるのは自然であろうと思われる。

(二) 依憑天台義集序の東唐の戒疏

最澄の依憑天台義集序には

最澄南唐之後稟此一宗、東唐之訓聞彼戒疏^②

という記述がある。この南唐東唐の意味は、俄かに断じ難いが、「東唐之訓聞彼戒疏」の内容が明らかになれば、最澄の拠る戒疏として大きな意味をもっている。試みに、東唐を東都に理解するなら、東都（洛陽）の大光福寺の僧であった道璿の戒疏ということになるであろうか^③。それに対して、南唐を天台山と理解するのは、自然のように思われるが如何であろうか。以上の試みは、あくまで推量の域を出ないが、この戒疏が、最澄にとって重要な意味をもつことは事実である。

結

以上、述べてきた点からみると、最澄の梵網戒受容は、本覚思想導入の契機であったことが知られよう。梵網戒自体が多分に本覚的な性質をもつものである。また奈良時代以来の道璿の梵網戒疏や、慧思作とされた大乘止観法門の思想は、すでに最澄にその思想基盤を作っていたのではないかと思われる。道璿の戒疏はとくに最澄はその師行表を通じて親近するものがあつたであろうし、本覚思想的に梵網戒を受容する用意は整えられていたようである。勿論、

最澄の梵網戒受容については、法華經安樂行品の問題をはじめ、その他の諸問題も考究されねばならないが、日本天台の中核思想とみなされる本覚思想よりみると、如上のことが考えられるのではないかと思われるのである。

註① 大正蔵一二卷四〇七頁b、曇無讖訳涅槃經卷七、如来性品。

「如来今日普示衆生諸覺宝蔵、所謂佛性」

「我者即是如来蔵義、一切衆生悉有佛性」

② 大正蔵三一卷八二五頁a。

③ 同 三二卷五七六頁b。

④ 同 五七九頁a。

⑤ 印度学佛教学研究九ノ一、一七号「伝教大師の本覚思想——佛身論を中心にして」

⑥ 大正蔵二四卷一〇〇三頁c。

⑦ 仁王般若経は中国で成立したものと考えられるが、一応、羅什訳とする。後出の不空訳についても同じことがいえる。

⑧ 大正蔵八卷八三七頁a。

⑨ 大正蔵八卷八二七頁a。

⑩ 最澄の註仁王般若経では、薩婆若が薩云若となる。それを「一切智」と註しているが、「覚」についてはふれていない。伝教大師全集四卷八六頁参照。

⑪ 伝教大師全集一卷五八〇頁。

⑫ 同 六一八頁。

⑬ 大正蔵四六卷七九五頁a b。

⑭ 伝教大師全集一卷三〇四頁。

⑮ 同 三卷五八三頁。

⑯ 同 一卷 二五頁。

⑰ 同 六三四頁。

⑮ 同 六三四頁参照。

⑯ 同 三卷三五九頁。

⑰ 卍統藏一、五九、三、二四一、右下。

⑱ 同 二四一、左上。

⑳ 伝教大師全集一卷二三二頁。

㉑ 同 五四八頁。

㉒ 大日本古文书八、五三六頁。

㉓ 大正蔵四六卷六四二頁 a b。

㉔ 卍統藏二、一〇、一、一頁。

㉕ 伝教大師全集一卷二一二頁。

㉖ 同 三卷三四四頁。

㉗ 東唐を、揚州の鑑真とその門人の意に解するなら、法進の註梵網經であろう。しかし、何れにしても意味なお不明である。